沿革編

第1章

1974年まで

大同生命厚生事業団、

国

民の健康保持の増進に一役を

公益財団法人 大同生命厚生事業団は、1974年5月、財団法人 大同生命厚生事業団として設立した。目的は、人間優先の理念に 基づき、生活環境の悪化などによりもたらされる健康被害の減 少と防止を図る諸事業の助成などにより、国民の健康の保持と 増進に寄与すること(定款第3条/目的)。その設立までの経緯は 次のとおりである。

当財団の出捐企業である大同生命保険株式会社(以下、大同生命)は、創業以来、一貫して相互扶助の精神に基づく経営を行ってきたが、同時に生命保険の社会性に鑑み、社会の信頼に応え、常に公共の福祉の増進に寄与しなければならないと考え、1954年度決算より毎年の剰余金の一部を社会事業助成積立金として積み立て、種々の厚生福祉事業の助成を行っていた。

当財団設立当時の日本は高度経済成長の一方、乱開発による 自然破壊、大気・水質汚染とそれに伴う健康被害が大きな社会問題となっており、ほかにも高齢者の医療福祉や生活習慣病、がんや難病対策など、国民の健康の保持と増進をめぐる社会的要請が増大していた。そこで大同生命は、生活環境の悪化からもたらされる健康被害の減少と防止をはかる諸事業を助成し、いささかなりとも国民の健康の保持と増進のお役に立ちたいという念願の下に、事業団設立を目指すこととした。

1972年、大同生命企画部において厚生事業団設立の具体案を作成し、厚生省(現厚生労働省)と折衝を始めた。翌年には、「社会福祉事業を含む関連事業分野の拡大」を重点課題として「新長期計画」(1973~1977年度)を策定し、その翌年に設立許可を得た。このような経緯で、地域のために地道な努力を重ねる研究者に対して医学助成の事業を行うことが決まり、今につながっている。

1974年 5月 1日 登記完了 5月27日 第1回総会開催 発足時財産は大同生命よりの寄附で1億2,000万円 (基本財源1億円、運営財産2,000万円)



出原信造理事長

設立趣意書

設立者 大同生命保険相互会社 取締役社長 益邑 健



わが国の産業経済のめざましい躍進によって、国民 所得の水準は上昇をつづけ、ゆたかな物的生活を享受 できるようになりました。

しかし一方、環境汚染による健康被害の発生、老人の医療福祉や成人病問題さらにガン克服や難病対策など、国民の健康の保持と増進をめぐる社会的要請はますます強くなってまいりました。

現在および将来の世代のためにこれらの諸問題の解決をめざしてたゆまぬ努力をつづけることは、いまや国民の一人ひとりに課せられた崇高な責務となっております。

大同生命保険相互会社は、昭和29年度決算より剰

余金のなかから社会事業助成積立金を積立ててまいりましたが、このたびその一部をあてて国民の健康の保持と増進を目的とする財団法人を設立したいと存じます。設立の趣旨に沿って広く多角的な活動を展開してまいりますが、その主たる事業には医学研究助成金の贈呈、健康の増進と疾病の予防に関する知識の普及と助成事業などがあげられます。

もとより一民間企業の果せる役割は微々たるものでありますが、多年生命保険事業を通して国民の健康の保持と増進に多大の関心を寄せてまいりました、弊社のささやかな証しとご理解いただきたいと念願するものであります。

COLUMN

受け継がれる広岡浅子イズム

連続テレビ小説「あさが来た」(NHK)のヒロインのモデルとなったことでも知られる広岡浅子は、大同生命の創業にも深く関わっている。

広岡浅子は、大阪の豪商・加島屋に嫁ぎ、その加島屋が 真宗生命を買収したことが大同生命の始まりである。諸文 書からは、生命保険事業を始めるにあたり、さまざまな交 渉を広岡浅子が中心となって行ったことがうかがえる。

広岡浅子は日本女子大学の設立に尽力し、また実業家として活躍した。加島屋の主たる事業を引退したのちも、失業者に仕事を提供する事業や職業訓練を推進して女性の自立を支援するなど、さまざまな募金活動や救護事業を行っていた。

助成金贈呈式などで、受贈者からドラマを見て「勇気づけられた」「広岡浅子のようにさらに積極的に活動していきたい」との声が今も多く聞かれる。



15